

# 大学生における葛藤解決方略と恋人による被支配感の関係

Relationship between conflict resolution strategies and the sense of being controlled by dating partners in university students.

上野 淳子・赤澤 淳子・松並 知子・井ノ崎 敦子・下村 淳子

Junko UENO, Junko AKAZAWA, Tomoko MATSUNAMI, Atsuko INOSAKI and Junko SHIMOMURA

## 要旨

恋人間の葛藤時に用いる方略と、デートDV被害の関連を検討した。デートDV被害は、恋人からの暴力行為被害、恋人による被支配感、精神的健康度を示す本来感から成るものとして捉えた。大学生を対象として質問紙調査を行った結果、適切な方略とされる協調方略は女性が男性より多く用いていた。男性では服従方略が、女性では支配方略が暴力行為被害と最も関連していたことから、ジェンダーステレオタイプに反する方略は恋人からの暴力行為を受けるリスクを高めることが示唆された。恋人による被支配感は男性が女性より高かったが、その原因は暴力行為を受けたことではなく、自身が支配方略を用いることにあった。また、男性は恋人による被支配感と本来感に関連はなかった。しかし女性は暴力行為を受けると支配され、支配されることで本来感を損なっていた。暴力行為を受ける程度にジェンダー差はなくとも、暴力行為から受ける負の影響が女性の方が大きいことが示された。女性の協調方略は被支配感を低める効果があったが、男性では協調方略のメリットは示されなかった。ジェンダー差に考慮しながらデートDV予防・防止プログラムを開発する必要性が示された。

キーワード：IPV、デートDV、支配-被支配関係、本来感、ジェンダー

Key Words: intimate partner violence, dating violence, dominant relationship, sense of authenticity, gender

## 1. 問題と目的

交際中の恋人による暴力であるデートDV (dating violence) は、将来のDV (domestic violence) 予防という観点からも近年注目を集め、一次予防を主眼とした様々なデートDV防止プログラムが実施されている (例えば井ノ崎, 2010; 中島, 2017; 笹竹, 2015; 田吹・岡本, 2016)。効果的なプログラム内容の開発にはデートDVの生起メカニズムに関する実証研究が不可欠であるが、それらは日本では発展途上である。一方、海外では日本よりはるかに多くのプログラムが開発・実施されている (赤澤, 2018)。恋人間に葛藤が生じた際、不適切な解決方略が用いられた状態がデートDVであるため、それらのプログラムは適切な葛藤解決スキルの獲得を目指している。例えば Foshee, Bauman, Arriaga, Helms, Koch, & Linder (1998) のプログラムは葛藤対処スキル (conflict management skill) を、Wolfe, Wekerle, Scott, Straatman, Grasley, & Reitzel-Jaffe (2003) のプログラムは葛藤解決とコミュニケーションスキル (conflict resolution and communication skill) を含んでいる。適切な葛藤解決スキルを用いることはデートDV被害・加害を抑制すると考えられているが (Foshee et al., 1998)、実際は「部分的に非を認める」「妥協

案を出す」「問題を冷静に議論する」といった適切と考えられる葛藤解決スキルがデート DV のうち精神的暴力の被害・加害と正の相関があるという結果も得られており (Wolfe et al., 2003), どのような葛藤解決方略がどのようにデート DV 防止に資するかは慎重に検討する必要がある。日本におけるこれまでの研究では, 恋人間でどのような葛藤解決方略が用いられているか (青野・周・森永・葛西, 2011), 葛藤解決方略が恋人関係の維持・発展にどう影響するか (古村・戸田, 2008), 暴力被害に対しどのような葛藤解決方略を用いているか (寺島・宇井・宮前・竹澤・松井, 2013) が検討されてきたが, 葛藤解決方略のデート DV への影響を検討した研究は見当たらない。そこで, 本研究ではデート DV のうち被害を取り上げ, 葛藤解決方略が及ぼす影響を検討する。

対人的葛藤解決において最も適応的と考えられている方略は, 自他の合意を目指して話し合いを行う「協調 (交渉や統合とも呼ばれる)」方略であり, その他の方略は葛藤事態を避ける「回避, 自己の主張を通そうとする「支配 (主張とも呼ばれる)」, 相手の主張に従う「服従 (譲歩とも呼ばれる)」, 互いに要求水準を下げる「妥協」とするのが一般的分類である (益子, 2013)。しかし, 恋人との葛藤解決方略にこの5つを想定して調査を行った古村・戸田 (2008) は, 因子分析の結果, 上記の「協調」, 「回避」, 「支配」, 「服従」に相当する4因子のみを見出している。また, 大学生の葛藤解決方略を検討した深田・山根 (2003) も, 同様の4つの方略を用いている。したがって, 本研究でもそれら4つの方略を用いることとした。

デート DV 被害は, 暴力行為とそれによって恋人から支配される程度 (恋人による被支配感) から成るものとして捉える。暴力行為を受けた頻度のみでデート DV 被害を捉えない理由は, 暴力の本質は暴力行為そのものよりむしろ暴力行為によって形成, 維持される支配-被支配関係であり (伊田, 2010), 相手への恐怖心から主体性を失い, その関係から逃げ出すこともできないという支配-被支配関係の強固さが暴力被害の大きさを判断する指標となるためである (上野, 2014)。この方法を用いてデート DV 被害を検討した上野・松並・青野 (2018) および上野・松並・赤澤・井ノ崎・青野 (2019) では, 暴力行為が必ずしも被支配感を高めるわけではないことや, 男性は暴力行為を受けても恋人に支配されにくい傾向があることが明らかになった。つまり, 同じように暴力行為を受けても, 男性より女性の方が大きな負の影響を受けるのである。したがって本研究では, 暴力行為によって支配される程度とそのジェンダー差を考慮しながらデート DV 被害を検討する。暴力行為は上野・松並・青野 (2018) および上野他 (2019) と同じく身体的暴力, 性的暴力, 精神的暴力を取り上げる。精神的暴力は赤澤・竹内 (2015) の分類にならない, 相手を否定する「軽侮」, 危害を加えると告げる「脅迫」, 行動を監視する「束縛」の3種類を採用する。

また, 暴力行為を受けることおよび被支配感が高まることは, 精神的健康にも悪影響を与え, それもデート DV 被害の大きさの指標として用いることができる。上野・松並・青野 (2018) では精神的健康度を示すものとして自尊感情を取り上げたが, 今回は本来感を用いることとする。本来感は文脈によって変化することのない最良の自尊感情であり (伊藤・小玉, 2005), 精神的健康度の指標としてより適切であると判断されるためである。

本研究で検討するモデルを Figure1 に示した。葛藤解決方略は恋人から受ける暴力行為と恋

人による被支配感へと影響するだろう。最も適応的である協調方略は暴力行為被害と被支配感を低減するポジティブな影響が予想されるが、先述したようにむしろ被害と関連するという結果もあるため (Wolfe et al., 2003), ネガティブな影響を及ぼす可能性もある。その他の方略は支配-被支配関係の構築に寄与すると予想される。回避方略と服従方略は被支配的立場を取ることになるため、暴力行為被害を増幅し、被支配感を高めるだろう。反対に支配方略は暴力行為の被害よりは加害に結び付きやすく、被支配感も低めるのではないかと。しかし、暴力行為は相互的なものであり、加害を行う者は相手の暴力行為を誘発するため被害も経験しやすいことを考慮すると (White & Koss, 1991), 支配方略も暴力行為被害と被支配感を高める可能性もある。さらに上野・松並・青野 (2018) と同様に、恋人から暴力行為を受けると被支配感が高まり、暴力行為被害と被支配感はそれぞれ現在の精神的健康 (本来感) を損なうというパスを設定した。上野・松並・青野 (2018) では暴力行為被害から精神的健康へ直接のマイナスのパスは見られなかったが、これは過去に交際していた恋人も対象とした問題、つまり現在の精神的健康は過去の恋人からの暴力行為以降の様々な要因にも影響されることを考慮していなかったためという可能性もある。よって今回は現在交際中の恋人がいる者のみを対象とし、このモデルを改めて検討する。

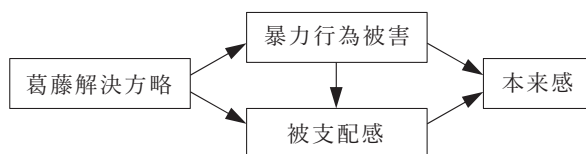


Figure1 本研究で検討するモデル

## 2. 方法

### 調査手続き

2017年4-7月、中部・近畿・中国・四国地方の大学および短期大学に所属する大学生を対象に無記名の質問紙調査を実施した。大学の授業終了時に調査用紙を配布し、回答を依頼した。

### 調査参加者および分析対象者

大学生 979 名 (男性 399 名, 女性 564 名, 性別不明 16 名) が調査に参加した。そのうち社会的望ましき尺度 (北村・鈴木, 1986) の合計得点が 18 点未満で、欠損値がなく、最も身近な人物として現在交際中の恋人を選択した男女を本研究の分析対象とした。該当者は 135 名 (男性 43 名, 女性 92 名) であった。分析対象の年齢は 18-22 歳 ( $M=19.68$ ,  $SD=1.10$ ) であった。

### 倫理的配慮

調査に先立ち、福山大学学術倫理審査委員会の承認を得た。調査用紙配布の際は、調査の目的、参加は任意であること、調査への参加または不参加によって不利益は生じないこと、個人

は特定されないこと、回答したくない質問をとばしたり回答を中断したりしても構わないことを、口頭および紙面で説明した。調査用紙末尾には地域のデート DV 相談機関を記載し、切り取って持ち帰ることができるようにした。

### 質問項目

1. **社会的望ましさ尺度** Crowne & Marlowe (1960) による尺度の日本語短縮版全 10 項目を用いた (北村・鈴木, 1986)。「はい」(2 点) と「いいえ」(1 点) の 2 件法であり、合計得点が 18 点以上の場合には社会的に望ましい方向へ回答が歪められていると判断される。

2. **本来感尺度** 伊藤・小玉 (2005) による全 7 項目から成る尺度を用い、「あてはまる」から「あてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。

3. **最も身近な人物** 現在最も身近な人物は誰か、「彼氏/彼女としての交際相手」、「同性の友人」、「異性の友人」、「その他」から選択を求めた。

4. **被支配感** 先の質問で選択した最も身近な人物に支配されている程度を測定するため、上野・松並・青野 (2018) の「恋人による被支配感」全 8 項目を用いた。ただし、上野・松並・青野 (2018) とは異なり恋人以外について回答する者もいるため、項目内の「恋人」は全て「その人」に変更した。「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。

5. **葛藤解決方略** 藤森 (1989)、相馬・山内・浦光 (2003)、古村・戸田 (2008) を参考に回避方略にあたる 2 項目、支配方略にあたる 2 項目、服従方略にあたる 2 項目、協調方略にあたる 5 項目、計 11 項目を作成した。最も身近な人物と「ケンカをして不愉快に思ったり、意見の不一致を経験したり」した時に自身がとる行動について、「かなりする」、「時々する」、「めったにしない」、「全くしない」の 4 件法で尋ねた。

6. **恋人からの暴力行為** 「現在または過去に、彼氏・彼女として交際していた相手」がいるか、「現在交際相手がいる」、「現在はいるが、過去にいた」、「これまで交際経験はない」から回答を求め、現在または過去に交際経験があると回答した者のみにその恋人から受けた行為について尋ねた。「けがをしない強さで叩く」(身体的暴力)、「いやがっているのに身体的接触を求める」(性的暴力)、「相手を否定したり、意見を認めなかったりする」(精神的暴力：軽侮)、「別れるなら自分は何をしてかすかわからないと言う」(精神的暴力：脅迫)、「交友関係や行動を見張るため相手のスマートフォンや携帯電話をチェックする」(精神的暴力：束縛) の 5 項目をされたことがあるか、「何度もある」、「一度だけある」、「一度もない」から回答を求めた。

## 3. 結果

### 葛藤解決方略の因子分析

葛藤解決方略全 11 項目に対し因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行ったところ、項目作成時の想定通り 4 因子が見いだされた (Table1)。それぞれを「回避方略」、「支配方略」、「服従方略」、「協調方略」と命名して因子得点を算出した。信頼性係数は回避方略で  $\alpha=.63$ 、支配方略で  $\alpha=.79$ 、服従方略で  $\alpha=.72$ 、協調方略で  $\alpha=.81$  であった。

Table1 葛藤解決方略項目の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4
<b>回避方略</b>				
よそよそしい態度をとる	.51	.22	.05	.05
メールやラインを無視する	.70	.06	-.03	-.09
<b>支配方略</b>				
自分の要求が受け入れられるように要求したり、命令したりする	.03	.83	.01	.06
相手が嫌がっていることでも、自分の要求を優先させる	.09	.73	-.01	-.04
<b>服従方略</b>				
相手の要求を受け入れ、それに従う	-.05	.17	.84	.00
自分の気持ちを抑える	.04	-.10	.69	-.03
<b>協調方略</b>				
納得するまで話し合う	-.14	.11	.03	.64
お互いにとって都合の良い解決策を提案する	.01	-.06	-.01	.60
自分の意見や気持ちを話す	-.01	.14	-.09	.78
相手の意見や気持ちを聞く	.17	-.24	.08	.78
相手に受け入れ可能な解決案を提示する	-.07	.06	-.02	.63

### 現在の恋人からの暴力行為経験

現在の恋人から、けがをしない強さで叩かれるという身体的暴力を受けたことが1度以上ある者は、男性で51.16% (n=22)、女性で48.91% (n=45)であった。いやがっているのに身体的接触を求められるという性的暴力を受けたことが1度以上ある者は、男性で13.95% (n=6)、女性で27.17% (n=25)であった。精神的暴力のうち軽侮にあたる、否定され意見を認めてもらえない経験が1度以上ある者は、男性で41.86% (n=18)、女性で39.13% (n=36)であった。同じく精神的暴力にあたる、別れるなら何をしでかすかわからないと脅迫された経験が1度以上ある者は、男性で11.63% (n=5)、女性で10.87% (n=10)であった。精神的暴力の束縛、すなわち交友関係や行動を見張るためスマートフォンや携帯電話をチェックされたことが1度以上ある者は、男性で27.91% (n=12)、大学生女性で23.91% (n=22)であった。それぞれの暴力行為を受けた経験がある者となない者の割合にジェンダー差があるか検討するため $\chi^2$ 検定を行ったが、いずれにおいても有意差は見られなかった(身体的暴力 $\chi^2(1)=0.59, n.s.$ ; 性的暴力 $\chi^2(1)=2.90, n.s.$ ; 軽侮 $\chi^2(1)=0.91, n.s.$ ; 脅迫 $\chi^2(1)=0.17, n.s.$ ; 束縛 $\chi^2(1)=0.25, n.s.$ )。

### ジェンダーによる得点比較

葛藤解決方略の因子得点、恋人からの暴力行為各項目得点、恋人からの暴力行為合計得点 ( $\alpha=.64$ )、恋人による被支配感合計得点 ( $\alpha=.78$ )、本来感尺度合計得点 ( $\alpha=.82$ ) にジェンダー差が見られるか検討するため  $t$  検定を行った。結果は Table2 の通りであった。

葛藤解決方略は協調方略のみで有意差が見られ、女性が男性よりも高かった。現在の恋人からの暴力行為は各項目、合計得点ともにジェンダー差は見られなかった。恋人による被支配感には男性が女性よりも有意に高かった。本来感には有意差は見られなかった。

Table2 t検定結果

	男性 (n=43)		女性 (n=92)		t 値 (df=133)	d
	M	SD	M	SD		
回避方略	4.86	1.74	5.32	1.46	-1.59	.29
支配方略	3.47	1.45	3.57	1.46	-0.37	.07
服従方略	5.72	1.52	5.43	1.35	1.10	.20
協調方略	16.19	3.08	17.67	2.08	-3.30***	.61
身体的暴力	1.91	0.95	1.91	0.97	-0.03	.01
性的暴力	1.23	0.61	1.40	0.71	-1.42	.25
精神的暴力：軽侮	1.65	0.84	1.63	0.85	0.13	.02
精神的暴力：脅迫	1.19	0.55	1.15	0.47	0.37	.07
精神的暴力：束縛	1.42	0.73	1.39	0.74	0.20	.04
暴力行為合計	7.40	2.34	7.49	2.47	-0.21	.04
恋人による被支配感	16.86	4.46	14.00	5.28	3.08**	.57
本来感	23.42	4.72	22.74	5.25	0.72	.13

\*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$ 

## ジェンダー別の相関

ジェンダー別に変数間の Pearson の相関係数を算出した。男性の結果を Table3 に、女性の結果を Table4 に示した。

Table3 男性の相関係数

	回避方略	支配方略	服従方略	協調方略	恋人による 被支配感	本来感
身体的暴力	.19	-.00	.31*	.33*	-.08	-.12
性的暴力	.26	.22	.33*	.07	.18	-.09
精神的暴力：軽侮	.49**	.40*	.28	-.02	.23	-.33*
精神的暴力：脅迫	.03	-.02	.29	.01	.28	-.10
精神的暴力：束縛	.08	.06	.41**	.16	.09	-.03
暴力行為合計	.35*	.20	.51***	.19	.19	-.23
恋人による被支配感	.25	.40**	-.01	-.07	—	-.16
本来感	-.26	-.15	-.38*	-.06	—	—

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$ 

Table4 女性の相関係数

	回避方略	支配方略	服従方略	協調方略	恋人による 被支配感	本来感
身体的暴力	-.08	.09	-.16	.06	-.06	-.01
性的暴力	.22*	.31**	.02	.04	.17	-.04
精神的暴力：軽侮	.22*	.40***	.14	-.01	.31**	-.07*
精神的暴力：脅迫	.19	.36***	.07	-.02	.21*	-.07
精神的暴力：束縛	.12	.19	.04	.06	-.02	.11
暴力行為合計	.18	.36***	.02	.04	.21*	-.02
恋人による被支配感	.19	.22*	.15	-.42**	—	-.36***
本来感	-.12	-.07	-.21*	.17	—	—

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$



男性では方略と暴力行為との間にいくつかの有意な正の相関が見られ、協調方略も身体的暴力と正の相関があった。支配方略は恋人による被支配感と正の相関があり、服従方略は本来感と負の相関があった。精神的暴力の軽侮と本来感の間には負の相関があった。

女性では回避方略と支配方略が暴力行為と関連していた。服従方略および協調方略と暴力行為の間に有意な相関は見られなかった。支配方略は恋人による被支配感と正の相関が、協調方略は恋人による被支配感と負の相関があった。服従方略は本来感と負の相関があった。恋人による被支配感と暴力行為合計、精神的暴力の軽侮、同じく精神的暴力の脅迫の間に正の相関が見られ、恋人による被支配感と本来感の間に負の相関が見られた。

### モデルの検討

ジェンダーで集団を分け、Figure1 のモデルについて多母集団同時分析を行った。なお、暴力行為被害は暴力行為合計得点を用いた。協調方略から暴力行為被害へのパスおよび回避方略から被支配感へのパスは男女いずれにおいても有意でなく、それらを削除した方が適合度が高かったため、その2つのパスを削除したものを最終モデルとした ( $\chi^2(12)=10.46, p=.58, GFI=.98, AGFI=.90, CFI=1.00, RMSEA=.00$ )。なお、ジェンダー間で係数の大きさに差があったパスに等値制約をおいた多母集団同時分析も実施したが、適合度は先のモデルよりも低かったため ( $\chi^2(16)=42.91, p<.001, GFI=.93, AGFI=.74, CFI=.77, RMSEA=.11$ )、等値制約をおかない分析を採用することとした。有意でなかったパスを削除した男性の結果を Figure2 に、女性の結果を Figure3 に示した。

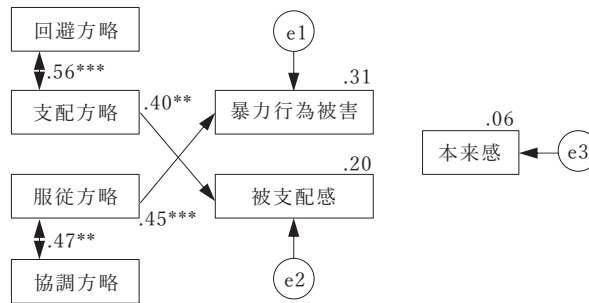


Figure2 男性の結果 (\*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$ )

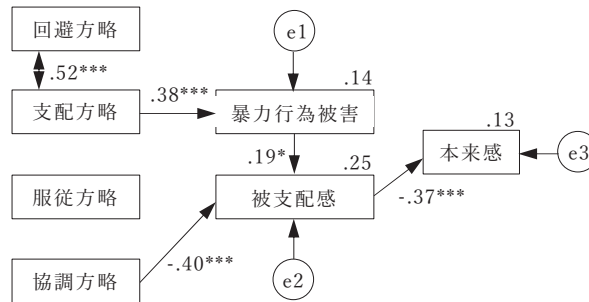


Figure3 女性の結果 (\* $p<.05$ , \*\*\* $p<.001$ )

男女に共通していたのは、回避方略と支配方略間の正の相関のみであった。男性はさらに服従方略と協調方略間に正の相関があり、暴力行為被害に服従行為から正のパスが、被支配感には支配方略から正のパスが見られた。しかし、暴力行為被害から被支配感へのパスは見られず、本来感へのパスは全く見られなかった。女性は支配方略から暴力行為被害への正のパスが、協調方略から被支配感への負のパスが見られた。さらに被支配感は暴力行為被害からの正のパスもあった。本来感へは被支配感からの負のパスのみが見られた。男女いずれも、暴力行為被害から本来感への有意なパスは見られなかった。

#### 4. 考察

暴力行為の被害経験にジェンダー差は見られなかった。本研究で取り上げたのは比較的軽度と見なされるレベルの暴力行為であったが、より重度と見なされる暴力行為も含めたこれまでの被害経験調査では、青年後期から成人前期ではジェンダー差がないという結果も得られているものの（上野他，2019），大学生では日本でも海外でも精神的暴力と身体的暴力は男性の方が多く受けており、性的暴力は、海外では女性の方が多く受けているが、国内では男女で変わらないという結果が度々見られる（上野，2014；上野・松並・青野，2018）。軽度とされる暴力に限ればジェンダー差はなかったという今回の結果は、暴力行為の軽重を考慮しながら被害とそのジェンダー差を捉える必要性を示すものである。

葛藤解決において望ましいとされる協調方略は男性よりも女性が多く用いていた。恋人との葛藤解決の際に用いられる方略を検討した古村・戸田（2008）では、回避と支配に相当する方略は女性の方が多く用いる、つまり不適切な方略を用いるのは女性の方であるという本研究とは異なる結果が得られている。この違いは質問項目や恋人関係の長さや質の違いが影響している可能性があり、今後の検討課題である。

男性は恋人からの被支配感が女性よりも高く、これは上野他（2019）の結果と同様であった。交際率と婚姻率のいずれも男性が低い現代では、女性が恋愛関係で優位に立ちやすく、男性は恋人の機嫌を損なわぬよう嫌われぬよう振る舞う傾向にあるのかもしれない。別れの主導権は女性が握っているという古村・戸田（2008）の指摘のとおり、恋人による被支配感は女性の方が低いという本研究の結果も、関係を存続させるかどうかの主導権を女性が握っていることを示していると解釈できる。

しかし、相関分析とモデルの検討からは、男性は恋人からの暴力行為によって支配されているのではないということが明らかになった。男性の被支配感を高めるのは、要求や命令を行って葛藤を解決しようとする自らの方略であった。支配方略が効果的に働いていないという感覚が被支配感に結びつく可能性、支配方略が交際相手の支配的行動を誘発する可能性が考えられる。今後は暴力行為以外のどのような行動が男性の被支配感を高めるのか、支配方略との関連と共に明らかにする必要がある。また、男性の場合、服従方略は暴力行為の被害を生んでいた。相手に従っても相手の暴力を抑制できず、かえって暴力を増大させるのである。さらに一般的に被害を抑制すると予想される協調方略にはそのような効果はなかった。それどころか協調方略は身体的暴力行為被害と正の相関があり、協調方略を用いる男性は暴力行為被害と最も関連



する服従方略も用いる傾向にあった。協調方略から暴力行為被害や被支配感に直接のパスが見られたわけではないものの、男性にとって協調方略は適応的ではないと言える結果となった。協調方略を用いる程度にジェンダー差があるという結果からも、協調方略はステレオタイプな男性性と相反するもので、弱い立場と結びつきやすい可能性があるため、このような結果が得られたのかもしれない。しかし、男性では暴力行為被害、被支配感、本来感の間には有意なパスが見られず、上野他（2019）と同様、男性は暴力行為を受けても女性ほどの心理的な負の影響を受けにくいことが示唆された。ただし、相関分析の結果からは、現在の恋人から否定され意見を認めてもらえないことは男性の本来感を低めることが示されているため、暴力の種類によっては男性も重大な負の影響を受ける可能性があることに注意が必要である。

女性においては、恋人からの暴力行為は恋人による被支配感を高め、それが本来感を損なっていた。暴力行為から本来感への直接的影響は見られなかった。恋人による被支配感に媒介されて暴力行為が精神的健康を損なうという結果は上野・松並・青野（2018）と同じであり、恋人による被支配感を考慮してデートDV被害を捉える手法の妥当性が改めて示されたと言える。暴力行為被害と最も関連していたのは支配方略であったが、支配方略は加害行為とも関連すると考えられるため、双方向的な暴力を引き起こすのかもしれない。あるいは支配的行動を取ろうとする女性はステレオタイプに反するため、それを罰するかのよう暴力行為が行われる可能性もある。男性の暴力被害と関連していたのは男性のステレオタイプに反する服従方略であったように、男女ともステレオタイプに反する場合に暴力被害のリスクが高まるのではないか。デートDV被害の予防・防止には、ジェンダーステレオタイプに囚われず、対等な関係を構築するための働きかけを行うことが有効だろう。

男性で適応的な影響が見られなかった協調方略は、女性では被支配感を低める効果があった。少なくとも女性のデートDV被害の予防・防止のためには、協調方略を身につけるプログラム開発が有効であることが示された。相関分析の結果からは、暴力行為の中でも軽侮や脅迫にあたる精神的暴力が女性の被支配感を高めており、些細と見なされがちな精神的暴力は女性を支配する重大な被害をもたらすことが明らかとなった。

最後に、葛藤解決方略とデートDV被害の関係を考える際に忘れてはならない残された問題を整理する。まず、葛藤解決方略、暴力行為、支配-被支配関係はそれぞれ相互性、相補性が考えられるということである。そのためにはカップルを対象とし、そのダイナミクスを明らかにする研究が今後不可欠である。

## 付記

本研究はJSPS 科研費JP16K01805の助成を得て行われた。

本研究で示した結果の一部は、2017年9月21日の日本心理学会第81回大会（於久留米シティプラザ）にて「デートDVを予防・防止する要因の検討(2)―恋人による被支配感を考慮したデートDV被害に葛藤解決方略が与える影響」として発表された。

本研究における調査の立案、実施は共著者全員で行った。分析と執筆は第一著者が行い、他の著者は分析の一部と考察全般に関わった。

## 引用文献

- 赤澤淳子 (2018). デート DV 予防プログラムの現状と課題 人間学研究, 17, 1-10.
- 赤澤淳子・竹内友里 (2015). デート DV における暴力の構造について—頻度とダメージとの観点から 福山大学人間文化学部紀要, 15, 51-72.
- 青野篤子・周 玉慧・森永康子・葛西真記子 (2011). 日本と台湾の大学生の恋愛における葛藤解決方略 黄自進 (編) 日本の伝統と現代 (pp. 559-592) 中央研究院 (台北)
- Crowne, D.P. & Marlowe, D. (1960). A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 349-354.
- Foshee, V.A., Bauman, K.E., Arriaga, X.B., Helms, R.W., Koch, G.G., & Linder, G.F. (1998). An evaluation of safe dates, an adolescent dating violence prevention program. *American Journal of Public Health*, 88, 45-50.
- 藤森立男 (1989). 日常生活にみるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究 社会心理学研究, 4, 108-116.
- 深田博己・山根弘敬 (2003). 大学生の対人葛藤解決方略に関する研究 広島大学心理学研究, 3, 31-49.
- 伊田広行 (2010). デート DV と恋愛 大月書店
- 井ノ崎敦子 (2010). 高校生対象のデート DV 予防教育プログラムに関する一研究—その開発と効果について 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 1318.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 北村俊則・鈴木忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について 社会精神医学, 9, 173-180.
- 古村健太郎・戸田弘二 (2008). 親密な関係における対人葛藤 北海道教育大学紀要 (教育科学編), 58, 185-195.
- 中島節子 (2017). 高校生のデート DV の予防教育—アクティブ・ラーニングを組み入れた予防教育から今後の活動を考える 地域総合研究, 18(Part1), 127-135.
- 益子洋人 (2013). 大学生における統合的葛藤解決スキルと過剰適応との関連—過剰適応を「関係維持・対立回避的行動」と「本来感」から捉えて 教育心理学研究, 61, 133-145.
- 笹竹英穂 (2015). 女子高校生を対象とした心理的デート DV の防止講座の効果検証 心理臨床学研究, 33, 441-450.
- 相馬敏彦・山内隆久・浦光博 (2003). 恋愛・結婚関係における排他性とそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響 実験社会心理学研究, 43, 46-55.
- 田吹和美・岡本正子 (2016). 高等学校家庭科における児童虐待予防教育の実践と課題—「デート DV」の授業を通して 生活文化研究, 54, 1-14.
- 寺島瞳・宇井美代子・宮前淳子・竹澤みどり・松井めぐみ (2013). 大学生におけるデート DV の実態の把握—被害者の対処および別れない理由の検討 筑波大学心理学研究, 45, 113-120.
- 上野淳子 (2014). デート DV 研究の問題点 四天王寺大学紀要, 57, 195-205.
- 上野淳子・松並知子・青野篤子 (2018). 大学生におけるデート DV 被害の男女差—恋人による被支配感と自尊感情に与える影響 四天王寺大学紀要, 66, 91-104.
- 上野淳子・松並知子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・青野篤子 (2019). 青年後期と成人前期におけるデート DV 被害—恋人による被支配感に与える影響 四天王寺大学紀要, 67, 33-43.
- White, J.W., & Koss, M.P. (1991). Courtship Violence; Incidence in a national sample of higher education student. *Violence and Victims*, 6, 247-256.
- Wolfe, D.A., Wekerle, C., Scott, K., Straatman, A.L., Grasley, C., & Reitzel-Jaffe, D. (2003). Dating violence prevention with at-risk youth; a controlled outcome evaluation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 71, 279-291.